

スポーツ庁委託事業「女性アスリートのための全国代表者会議」 報告書

東京大学医学部産婦人科学教室

会議名：第6回「女性アスリートのための全国代表者会議」

日時：2021年2月12日（金） 14：00～

開催方法：web会議（zoom）

出席者（以下、すべて敬称略）：

主催者： 東京大学医学部産婦人科学教室…能瀬さやか
一般社団法人女性アスリート健康支援委員会…川原貴
公益社団法人日本産婦人科医会…安達知子

| | 産婦人科医会 | 都道府県体育・スポーツ協会 スポーツ医・科学委員会 |
|-----|----------------|------------------------------|
| 富山県 | 吉本 裕子 鮫島 梓 | 鮫島 梓 |
| 福井県 | 細川 久美子 | 細川 久美子 |
| 岐阜県 | — | 佐藤 桃子 |
| 京都府 | 桑原 仁美 伊藤 美幸 | 馬淵 博行 |
| 大阪府 | 田辺 晃子 | 中嶋 千晶 |
| 福岡県 | 濱口 欣也 村上 文洋 | 安永 英樹 |
| 大分県 | 岩永 成晃 | 松田 貴雄 |

1. 内容

1) 主催者挨拶 公益社団法人日本産婦人科医会 安達知子
一般社団法人女性アスリート健康支援委員会 川原貴

2) 本事業の説明

(1) 概要

今年度より東京大学医学部産婦人科学教室が受託した、スポーツ庁委託事業女性アスリートの育成・支援プロジェクト「女性アスリート支援プログラム」において、「女性アスリートへの医科学的支援と各地域における支援体制の構築」をテーマに支援プログラムを実施している。

(2) 趣旨・目的

女性アスリートの専門家や関連団体が連携し、女性アスリートや指導者、メディカルスタッフに女性特有の問題についての情報提供を行うとともに、女性アスリートの受診環境整備を行うことを目的とする。

(3) 内容

一般社団法人女性アスリート健康支援委員会と連携を取り実施。女性アスリート健康支援委員会は2014年に設立、本会議に協力いただいた日本産婦人科医会、日本スポーツ協会も構成団体として入っている。

現在、以下の5項目について活動を行っている。

- a: アスリート・指導者向け研修会 (※)
- b: メディカルスタッフ向けカンファレンス (※)
- c: 全国代表者会議
- d: 関連団体会議
- e: 啓発活動

※新型コロナの影響を受けオンラインセミナーとして実施。7月から毎月3本、2021年2月まで計21本を、4000名の受講者を対象に無料で配信する。

本会議は、上記c全国代表者会議にあたる事業であり、全国の女性アスリートが各地域で医学サポートを受けられるよう、全国のサポート体制を整備することを目的とし、各都道府県における女性アスリートの支援の現状、課題について情報共有、意見交換を行う場として企画した。

※進行にあたっての注意点、挨拶ならびに参加者紹介は省略。

2. 協議事項(1)

各地区における女性アスリートに関する取り組みの現状について

【富山県】

●富山県産婦人科医会

- ・ 学校での性教育授業に行った際に、部活であまり無理をしないよう講演するなどの活動を少しずつ始めている。

●富山県体育協会スポーツ医・科学委員会

- ・ 指導者講習など女性アスリート問題の普及活動をしている。
- ・ だいぶ定着し、指導者やトレーニングセンター利用者から直接相談されることも多くなった。産婦人科医につないでもらうというケースも増えている。
- ・ 中学校、高校単位で、依頼があれば適宜、体育協会を介して講義を行っている。
- ・ 月経に関する問診票を取り入れ、必要な選手には体育協会から声をかけ、受診を促したり栄養士の話を引きいてもらう等している。ただ、まだ相談や受診に結びつく人が少ない。問診票で挙げた選手の指導をどうしていくのか検討中である。

【福井県】

●福井県産婦人科医会

- ・ 2018年に50年ぶりとなる福井国体を開催した際、女性アスリートを支援するため福井県産婦人科医会の女性産婦人科医8名でワーキンググループを作り、「福井県女性アスリート・ルナコントロールプロジェクト」を立ち上げた。現在はコロナのため活動が止まっている。
- ・ ただ、アスリート外来を立ちあげても、地方は交通アクセスの問題もあり、採算が取れない。アスリートは怪我では病院に行くが、それ以外では来ないので、自分たちから出向くことにした。最初は各競技団体、スポーツ医科学員会、スポーツ協会にお願いし、39団体に案内を出した。そのうち6競技団体から依頼があり、女子部を持っているところが多かった。
- ・ 講義は2部制で、1部は選手や監督などに向けた講義、2部は選手と医師の個別相談とした。受診が必要な人が気軽に来られるよう、敷居を下げる方法を取った。これまでに受けた個別相談は6名。
- ・ 当初は高校卒業以上が対象だったが、中高生への啓発の必要性を感じ、学校への働きか

けについて検討している。

- ・ WGの8名が対応できない場合もあるので、産婦人科医会で「こういう相談に来る人がいる」と情報共有を行った。
- ・ また、アンチ・ドーピングの最新情報に関する講演会を開いた。

【岐阜県】

●岐阜県スポーツ協会スポーツ医・科学委員会

- ・ 平成30年度より、女性アスリート特有の悩みや健康管理面のサポートにおけるスキルを向上すべく、スタッフが関連学会やセミナーに参加する予算がついた。
- ・ 各団体から送付された女性アスリート関連資料について、管理や指定選手への配布などを行っている。
- ・ 全アスリートを対象にした整形外科医による相談会と、女性アスリートを対象とした産婦人科医による相談会を年2回ずつ実施している。いずれも30分程度の個別面談。
- ・ 2019年度に初の試みとして、女性アスリート対象の個別面談の1回を「女性ジュニアアスリート親子健康相談会」として講義形式で開催した。7組13名が参加し、産婦人科医により、月経の仕組み、女性アスリートの三主徴等の講義が行われた。
- ・ 岐阜県スポーツ協会ホームページに相談窓口を設置し、電話やメールで何でも相談できる窓口を設置、対応している。女性アスリートの特有の相談は、必要に応じて産婦人科医に紹介している。

【京都府】

●京都府産婦人科医会

- ・ 2015年度に女性アスリート診療のための講習会を開催した。
- ・ 2021年3月7日に、「女性のライフデザインとリプロダクティブヘルス」というタイトルで府民公開web講座があり、京都府産婦人科医会が協賛している。京都府立医大産婦人科教室の産婦人科医が、部活動からプロアスリートまで女子スポーツを産婦人科医が支えるという内容で講演する。

●京都府スポーツ協会スポーツ科学委員会

- ・ 京都府スポーツ協会として、女性アスリート向けの研修会（医事相談）を行ったこともあるが、参加者が少なかった。
- ・ 指導者研修会は体罰やハラスメントが主。女性アスリートに関する問題もさらに取り

生んでいきたいと考えている。

- ・ 女性アスリートの課題に対しては、学校の男性の先生方は若干抵抗があるという声もある。

●その他／個人レベルの活動など

- ・ 京都トレーニングセンターには、ジュニア選手からオリンピック、パラリンピックを目指す選手が来ている。日頃、現場の生徒や先生方に接する中で、情報が行き届いていないという実感がある。

【大阪府】

●大阪府産婦人科医会

- ・ 女性アスリート健康支援委員会主催の講習会を受講した産婦人科医が大阪府内で約100名いる。日本スポーツ協会公認スポーツドクターを取得した産婦人科医は14名。施設単位で診療を行っているというよりは個人の医師が各地区で積極的に活動している状況。
- ・ 2020年は学校医指導の一環で女子学生アスリートを対象とした勉強会を開く予定だったが、コロナで中止となったので、来年度実施する予定である。

主催者：女性アスリート健康支援委員会の講習会受講者は現時点で約1500名なので、大阪で100名というのは多い。

●大阪府スポーツ協会スポーツ医・科学委員会

- ・ 大阪府医科学委員会は13名の委員で構成され、内訳は医師6名（内科医4名、整形外科医1名、泌尿器外科医1名）、その他7名（体育大学教授、AT等）。産婦人科医はおられない。医師は医師会が交代して入るので、診療科は様々となる。
- ・ 毎年この時期に、スポーツ指導者を対象とした大阪府のスポーツ医科学セミナーを行っており、約200～300名が受講する。今年のテーマは脳震盪とアンチ・ドーピング、去年はパワーハラスメントであった。過去には女性アスリートの健康問題について取り上げ、パネルディスカッションでは、内科医、オリンピックの指導にあたるスポーツ指導者、オリンピック経験のある女性アスリート等が参加して女性アスリートの健康問題について話し合った。
- ・ 大阪府スポーツ協会として、産婦人科医とタイアップする取り組みはできていない。大阪は競技団体が強く、個別に活動しているのが現状である。

【福岡県】

●福岡県産婦人科医会

- ・ 中高生の部活を診ていると、本人や教育者に「月経がないと楽でいい」「痩せている」「タイムが伸びる」という共通の認識がある。
- ・ 福岡県は性教育に力を入れている。そういう機会を利用して中高生に女性の身体の教育を強化することが必要だと感じている。
- ・ 若い子は有名女性アスリートが発信すると興味を持つ。コロナ禍では難しいが、大会やシンポジウムがあれば注目度が増える。
- ・ 医会としての体系的なプロジェクトはないが、最近、当地の女性医学学会の女性専門医に実業団の女子駅伝部から選手をトータルで管理してほしいという話があった。

●福岡県スポーツ協会スポーツ医・科学委員会

- ・ 強化選手がトレーニングを行う施設「アクション福岡」には託児スペースがある。令和元年、選手が安心してトレーニングできる「福岡子育てマイスター」という県のシステムが開始した。令和元年に、強化選手が海外遠征等に行く間、ベビーシッターや託児施設を利用する費用を県が補助する制度が開始したが、周知が徹底されていないためか、利用者がいないのが現状。
- ・ 令和元年12月、医科学委員会を中心として、女性アスリートの研究をサポートする委員会を立ち上げた。委員会メンバーは、スポーツ医科学委員を中心に、女性の整形外科医やスポーツ団体の女性指導者など。
- ・ 令和元年から3年度にかけて、アンケート調査を行って課題を抽出する計画だったが、コロナで中断している。

●その他／個人レベルの活動など

- ・ 高校で性教育の講義をする時や、大学に講義に行く時は必ずスポーツの話をする。
- ・ 病院で女性外来を立ち上げ、中高生を診ている。
- ・ 体育協会からの依頼で大会に参加した時には、そこで相談に乗っている。

【大分県】

●大分県産婦人科医会

- ・ 現在、医会には日本スポーツ協会スポーツドクターが4名、女性アスリート健康支援委員会の講習を受けた医師18名がいる。
- ・ 昨年12月、大分県スポーツ推進計画ができ、女性スポーツに関する活動の推進は拳が

っているが、取り組みは女性がスポーツを楽しむための環境整備、スポーツ団体における女性役員の登用、女性指導者の育成等。国体レベルのトップアスリートを診るという認識しかない。

- ・ 学校教育における若い世代のサポートも、調べた範囲ではない様子。
- ・ 大分県で活躍するのはトップアスリートではなく、将来のアスリートになる中高生。高校までの学校教育において、アスリートを目指す子が不要な怪我をせず、アスリートとして育つ環境を作るのが産婦人科医会の役目だと捉えている。今年度の産婦人科医会の事業にそういったアスリートの支援を挙げている。
- ・ 体育協会や教育委員会とどう連携できるかを模索中であるが、アスリートといっても幅が広い。大分県産婦人科医会としては、若い中高生が将来アスリートとして継続していけるサポートを目指すというのが私たちの目指すところである。

主催者：女性アスリート健康支援委員会は、トップアスリートより競技レベルの低い選手たちや、若い世代の選手を中心に支援することを目指している。

●大分県スポーツ協会スポーツ医・科学委員会

- ・ 現在、スポーツ医科学委員会に内科医がおらず、産婦人科医が男性アスリート、女性アスリートともに内科もカバーしている。
- ・ 大分県スポーツ医科学委員会にメディカルサポート委員会があり、メディカルチェックとして男子 150 名、女子 150 名、計 300 名に血液検査を実施している。以前行っていた内科健診が血液検査に変わり、ホルモンを入れるようにした。
- ・ 大分県はトップアスリートはおらずほぼ高校生で半分が女子。バレーボールの女子高校が有名で、それ以外は全国大会レベル。10 団体前後あり、血液検査の結果を伝えるに行くときに女性アスリートに関する講義を行っているが、女子に特化した動きはない。
- ・ 大分県として、スポーツに医科学的なサポートを入れる方向性だが、女子に特化したという面ではあまり進んでいない。

●その他／個人レベルの活動など

- ・ 女性アスリート特有の問題として一番多いのは貧血で、その先に無月経。最初から無月経で受診する人はあまり多くない。「パフォーマンスが上がらない」「貧血が多い」という理由で受診し、そこから話を進めるというパターンが多い。整形外科医がいないため整形も診ている。整形については男子、女子ともにエネルギー不足が多く、外科的なりハビリの過程で、内科的サポートや栄養的サポートをどう行うか、栄養士と一緒にやっている。

3. 協議事項(2)

各地域における女性アスリート支援の課題や要望について

【富山県】

●富山県産婦人科医会／富山県体育協会スポーツ医・科学委員会

- ・ 課題は、問診票を活用して、無月経の問題を抱えている選手に栄養士や産婦人科医の受診を促しているが、なかなか受診に結びつかないこと。
- ・ 中高における指導者のパワハラ問題などが少しずつ出ており、その対応が求められているが、医療者としての関わり方が見えていない。背景に、本来エネルギー不足にならないバスケットボールやハンドボールといった競技で無月経や月経不順を起こす選手が多い学校があり、そういう学校で問題が起きていると聞く。そこに介入し、予防ができないか考えている。パワハラやセクハラは大きな問題なので全国的に考えるべき問題。いい案があれば教えてほしい。

主催者：各団体にハラスメントの相談窓口があるが、所属するところには相談しにくい面がある。そういう場合は、日本スポーツ協会や、トップレベルしか相談できないが日本スポーツ振興センターなどがある。大学生は大学スポーツ協会が相談窓口を設けている。

【福井県】

●福井県産婦人科医会

- ・ 指導者、特に男性には相談しにくいということから、我々が出向くプロジェクトを2部制にして個別面談を設けた。保護者や指導者は入れず、指導者も面談の内容について詳しくは聞かない。実際まだ数は多くなく、指導者がどこまで女性アスリートのことを考えているかにかかっている。
- ・ 2015年に、国体強化選手で県内のトップレベルを対象に、月経に関するメディカルアンケートを実施した。回収した6割のうち3割近く、28.9%が月経に関する項目に「問題がある」と回答した。しかし、実際に受診したのは1割以下だった。福井国体が終わり2019年に再度同様のアンケートを実施したところ、月経に関する項目に「問題がある」と回答した人が4割に増えた。以前は「これが普通」「こんなこと相談することではない」と思っていたのが、選手の意識が変わり、問題意識を持つ人が増えたか。一方、受診した人は増加していなかった。

【岐阜県】

●岐阜県スポーツ協会スポーツ医・科学委員会

- ・ スポーツ協会として講習会や相談会を実施しているが、その後の参加者のフォローや継続的な聞き取りはできていないので、そこを強化したいと考えている。
- ・ 選手や保護者の講習会への関心は高いが、特に学校現場の指導者—あまりアプローチできていないが—へのサポートや講習会参加を促す活動が不十分である。もう少し強制力があれば有効かと思う。
- ・ 課題は、協会ホームページの相談窓口の活発化と、回答の質を向上すること。スポーツ協会スポーツ科学センターでは主にサポート指定選手を支援するが、普通の学校の部活動 level への啓発ができていない。女性特有の問題に対しては10代のサポートが重要だが、高校生以上が主な対象者となっているので、その点も課題である。
- ・ 今回会議に参加し、自分たちの活動を見直し、さらに積極的に活動をしたと思った。要望として、ネットワーク内でいつでも意見交換ができるシステムを作ってもらえるとありがたい。
- ・ スポーツ科学センターはトレーナーとして選手を支援する窓口になる。協会に整形外科医や産婦人科医がいないため、医科学協議会に所属する医師と連携しているが、例えば岐阜県産婦人科医会から、産婦人科医の視点でトレーナーにしてほしいことを挙げてもらえると、新たな支援が可能になる。

【京都府】

●京都府産科婦人科学会

- ・ まだ目立った活動をしていないので、府内の大学病院とも連携しながら活動を広げていきたい。

●京都府スポーツ協会スポーツ科学委員会

- ・ 日本スポーツ協会の資格や研修で知識は得ても、その実践が難しい模様。選手に月経の問題などが生じて、先生が対応すると偏った形に見えてしまうので難しい。
- ・ 自分が所属する京都トレーニングセンターでサポートをしているチームに女子チームもあるが、男性スタッフにいろいろな問題を話してくれる。指導者でない立場のメリットかと思う。いかにより添えるかが大事である。
- ・ 地域に気軽に問い合わせができる場所があるといいと思う。例として、センターで支

援する選手で、無月経で体重が急激に低下した選手がいた。センターに月1回来る整形外科医に相談し、産婦人科医につないでもらった。個人と個人のつながりレベルを含めて、地域で枠組みができないかと考えている。

【大阪府】

●大阪府産婦人科医会

- ・ 学生、指導者への啓発活動として、学校医を対象とした講習会を今年実現したい。そのために、スポーツ医科学員会と連絡を取り合い、連携したい。

●大阪府スポーツ協会スポーツ医・科学委員会

- ・ 医科学委員に産婦人科医がいないが、体育大学の先生は多いので、まずは国体にアスレティックトレーナーが帯同するところから、前向きな動きが進んでいる。
- ・ 競技団体が選手に近いところで指導しているが、加えて大阪府スポーツ協会としてアスレティックトレーナーの組織化が進むことで、選手の栄養面のサポートも含めて女性アスリート支援の底上げができると良いと思っている。
- ・ 毎年、内科医とスポーツファーマシストによるアンチ・ドーピングの教育をしっかりと行っている。受診の仕方とともに、サプリメントに頼らないとか、エネルギー不足にならない等、栄養面に対することを男女アスリートにも働きかけている。栄養面というところで内科医とも連携していけたらいいと考えている。
- ・ 中高生の選手は問題が上がってこないことが多い。以前より、委員会に中学校連盟会長、高体連会長が入っている。委員会で、その先生方に、中学高校での教育について具体的に尋ね、産婦人科医とも連携が取れたらと思っている。
- ・ 通常200、300名が集まる講習会は、オンラインで行うのは難しい。スポーツ医科学委員会も令和2年度は開催されていない。
- ・ 本日の報告を医科学委員長にも報告するとともに、大阪府スポーツ医科学員会でも議題として取り上げる。

【福岡県】

●福岡県産婦人科医会

- ・ 医会としては、中高生のスポーツをする女子が、どう健康に過ごせるようにするかが一番問題と感じている。福岡県は30数年前から県内にある106の県立高校にそれぞれ産婦人科医と精神科医が学校医として配属され、性と心の相談事業をやっている。

これを活用し、スポーツやアスリートの内容を増やして授業・講義をやっていききたい。

- ・ 福井県同様、集団での講義の後に個別面談をやっており、月経についての相談を受ける。若い子は話すチャンスを待っているのではないか。そのあたりを拾い上げていきたい。
- ・ 他県の話を参考にして、さらなる支援体制づくりを考えていきたい。

●福岡県スポーツ協会スポーツ医・科学委員会

- ・ 医科学委員の研究委員会として、県内のアスリートが何に困っていて、何を支援すべきかを知るため、アンケートを実施し、分析して行動につなげるというプロジェクトを立ち上げた。強化選手の約900人を対象に第1回目となるアンケートを発送する前の一部の選手に返信封筒付きでアンケート調査を行ったが、返答が少なかった。女性アスリートと言っても年代、カテゴリー、背景は様々で絞るのが難しい。今後の実施について、どう見直すか検討中である。
- ・ 私見ではあるが、今日参加されている先生方と連携してやることも踏まえ検討した方が、スムーズに進む印象を持った。その他、何か良い方法があれば教えてほしい。

主催者：提出が必須な書類に同封する等も考えられる。

【大分県】

●大分県産婦人科医会

- ・ 今回の会議で、スポーツドクターとして活動している産婦人科医がいることがわかった。
- ・ 各地域における支援体制の構築については、モデルや方向性を示していくと良い。
- ・ 大分県については産婦人科医会とスポーツ協会の連携があまりなく、産婦人科医もあまり興味を持っていなかったのが現状である。医会としては、産婦人科医のモチベーションを上げることが課題。
- ・ 今後のスポーツ協会との連携のためにも、まずは産婦人科医会としてできることをやっていくということを広報しながら動いていきたい。

●大分県スポーツ協会スポーツ医・科学委員会

- ・ エネルギー不足は痩せている人に多いとされるが、自分が診ている範囲では、ラグビー等筋肉が多い人や、バスケットボールやバレーボール等の背が高い人に相対的なエネルギー不足がかなり多いと感じている。地方の女子選手の問題は月経困難症以外もあるので、そういった視点で指針を考えていただければと思う。
- ・ 無月経とパフォーマンスが関係するのか、わかっていない人が多い。自分が診ている無

月経の選手では貧血の子が多いが、貧血だと当然パフォーマンスが落ちるので、ヘモグロビンが下がっているのがパフォーマンスと関係するという話から入っていく。最初から「無月経」の話をして、自分のパフォーマンスとは関係ないと思うと関心を示さない。産婦人科医が関与する時は、選手にとってわかりやすい指標が何かを考えることも必要だと思う。相対的エネルギー不足は筋肉量の多い人や背の高い人に非常に多いという点も念頭においていただければと思う。

4. その他(意見交換／質問など)

質問1：男性指導者や教員が、女子の身体の悩みを聞くのは難しい。どのような対応が望ましいか。

主催者：

例えば、3、4問でいいので、最終月経や月経痛で授業や練習を休んだことがあるか等、簡単な質問を3～4カ月ごとに学校でとってもらって回収し、養護教諭の先生がチェックして校医や婦人科につなげるのはどうか。

学校では難しいが、可能ならトレーナーなどの女性スタッフを介すると良い。男性指導者の場合、そういう意図がなくてもセクハラと受け取られる可能性がある。男性指導者は一般的な話をして、そういう問題が出たら養護教諭や産婦人科医に相談するとよいとアドバイスすることは良いと思う。

選手は、指導者には問題を隠す傾向がある。その点では養護教諭が望ましい。

質問2：バレリーナで無月経の患者を診ている例はあるか。

主催者：

減量で無月経になり受診するバレリーナは結構いる。バレリーナは新体操と競技特性が似ている。新体操より活動期間が長く、引退が遅いという傾向があるので、より長期にわたるサポートが必要になる。バレリーナもアスリートと捉え、その人の活動に寄り添って治療計画を立ててあげるとよい。

質問3：月経の話は審美系に多いが、コンタクトスポーツの女性アスリートは一般の女性として考えていいか。管理方針に違いはあるか。

主催者：審美系や長距離は相対的なエネルギー不足と無月経が問題になる。月経がある選手は月経困難症や月経前症候群がある。これは一般の女性も同じだが、アスリートはパフォーマンスに影響するため、試合との関係をどう調整するかという特徴がある。この点では幅広い種目の選手が対象になる。

<参考：東大病院女性アスリート外来での対応>

女性アスリート抱える問題は様々ある。無月経が問題になりやすいが、割合としては月経随伴症状を抱えているアスリートの方が多い。

<月経随伴症状の対策>

競技を問わず、OC・LEP やプロゲスチン製剤を使用してコントロールを行う。

<無月経>

アスリートに多い原因は、利用可能エネルギー不足。治療の第一選択はホルモン療法ではなく、エネルギー不足の改善であり、競技特性別に方針が異なる。

審美系、持久系、陸上長距離、新体操など：

まず栄養指導を行ってエネルギー不足を改善し、月経を再開させることが目標である。持久系、審美系は、栄養指導だけでは1年経過しても月経が再開しない場合が多い。このよう

な競技の選手は、半年ほど栄養指導を行った後にホルモン補充療法を行う。

球技系、体重階級制、技術系：

バスケットボール、アーチェリーなどの技術系や、柔道などの体重階級制の競技は、エネルギー不足にはなりづらいという競技特性がある。これらの競技選手がエネルギー不足になった場合、栄養指導によるエネルギー不足の改善のみとし、原則としてホルモン療法は行わない。

5. まとめ

- ・ 「産婦人科医会、スポーツ医・科学委員会としての取り組みがまだ進んでいない」、「指導者の理解不足」、「受診に結びつかない」という現状は当然で、急激に普及して仕組みができるものではない。女性アスリート健康支援委員会はこれからそれに取り組むために立ちあげた。
- ・ 今回参加された先生方は、取り組みへの意思をお持ちである。できるところから少しずつ始めていけばよいと思う。その方法や解決策について、今回のような会議を再度実施し、先生方が相談できる場にするのは非常に良い。
- ・ 肝心なことは、本当に困っている選手が「受診したい」と言った時に、適切な紹介ができるようにすることである。1例、2例とそういう例を積み重ねることで、現場の信頼を得られる。
- ・ 産婦人科医会では、相談があったときに紹介できる先を整備していただきたい。それには経験も必要で、講習会を受講しただけですぐ対応できるわけではなく、また、スポーツ選手のことを理解していないと対応が食い違うこともある。まずは選手が困ったときに対応できる先生方をリストアップして、紹介していく。講習会をしても理解しない指導者もいるが、理解して、「実は困っている、どこか紹介先はないか」ということがある。
- ・ 産婦人科医以外、特に整形外科のスポーツドクターは大勢の選手を診療している。疲労骨折の背景には無月経があり得る。月経に問題がありそうだと場合は、県内の産婦人科医を紹介できるようにする。それを、医会からでも医科学委員会からでも産婦人科医以外のスポーツドクターに伝えていただくのがよいと思う。
- ・ 同時に、学校や指導者への啓発を行う。学校については産婦人科医会の先生の方が関係が強い。ぜひ学校への情報提供もおねがいしたい。

以上